



みずみどり

2014年 11月15日 第105号

発行：いたばし水と緑の会事務局

年会費 2,000 円 郵便振替 00170-8-352508 いたばし水と緑の会
<http://homepage3.nifty.com/mizutomidorinokai/>E-mail : mizumidori@nifty.com

〒174-0063 板橋区前野町 5-31-7 瀬田方 tel&fax3969-7124

湧水に思うこと

地球は水の惑星である。

水のない生活なんて我々人間にとっても、生きとし生けるものすべてのものにとって、なくてはならないものである。しかし、時には水の力によって大災害を引き起こす事も、度々、目にしたり耳にします。一番身近にありすぎていて、その有難さをついつい見過ごしているのではないだろうか。

板橋区でも、自然環境を大切にしようと言っているが、本当に実行されているのだろうか、ミニトンボ池に流れ込む湧水にしても、「もっともっと大事にしてあげられればいいな」と思うのは、私だけではないと思います。

湧水とは、地下からの贈り物なのではないだろうか、地上に降った雨が地中にしみこんで、複雑な地下の割れ目を通して姿を表すのではないのでしょうか、地下の構造がどうなっているのか、考えるだけでも、わくわくするのは、私だけでしょうか。ミニトンボ池の向かい側にある不動の滝（写真下）には、この様な看板があります。



【かつて板橋区内の崖下には、いたるところで水が湧き、人々の生活にうるおいを与えていました。この滝もその一つです。山岳信仰が盛んになった江戸時代の中頃からは、地元の人たちが富士山や大山（現 神奈川県伊勢原市）などの霊山に詣でる際に、身を清める「みそぎ」場として使われていました。昔は、滝つぼの前に垢離堂（みそぎをする施設）が設けられていたそうです。またこの滝の上には、あたかも守護神のように不

動明王の石像が二体まつられています。この滝水は、いかなる時でも涸れることはないと伝えられていますが、周辺の宅地開発に伴い水量は減少しています。それでも自然の豊かだった時代をほうふつさせる遺構として、いまでも地元の人たちによって守られています。

平成14年度に東京都の名湧水57選に選定されました。]

自然と歴史と文化の里・赤塚

と表示されている通り、自然の豊かさを伝えてくれる目にみえる現象なのです。

大仏下からの湧き出す水だって、滝のように恰好よくはないけれど、昔の人たちと同じように利用してこそ水ではないだろうか。



かしてみました(写真上)。それにしても湧水が見られる場所が、ゴミ捨て場とフェンス越しでしかみられないなんて、なんとも寂し限りです。私たちも湧水の道をもう少し綺麗にして、「大仏下湧水」をアピールしてみましょう。

(山田元一郎)

きれいにして数年前(写真右)のもう少しましな湧水の池に戻したい。



自然を大切にする文化の場所にしては、現在の状況はどうなのでしょう。昨年の台風で倒れた松がミニトンボ池に覆いかぶさって数か月、ようやく片付けたと思ったら湧水の道にゴミのごとく積あげてそのまま。何も言わなければ何カ月も積み上げたまま放置されてしまいそうなので、10月25日、見るに見かねて、ど

赤塚城址のんびり散歩

10月18日、今日は、バッタ広場の作業はお休みして、皆で城址の散歩をすることになりました。秋晴れのさわやかな1日、参加者は、女性4名、男性3名です。歩く植物図鑑みたいに、皆の質問に何でも答えてくれる猪鼻さんも加わり、さて今日はどんな発見があるでしょうか。

スタートはトンボ池、その前のスダジイの木の下で、橋田さんがドングリを拾っています。何にするのかな、と思ったら、食べられるとの返事。でも木によって実の大きさに違いがあり、トンボ池のは小さいそう。大きな実のなるスダジイの木を知っていて、毎年、拾いに行くとのこと。今年も行って来たと、その大きなシイの実をおみやげにいただきました。

さて、その食べ方は？ しばらく置いて、茶色の殻が割れたら、中から白い実を取りだして、それをフライパンでからいりするか、または電子レンジに少しかけるといいそうです。私は、オーブントースターでローストして塩をふっていただきました。なかなかの味、ビールのつまみに良いですね。

少し行くとカルガモの池、近くに緑色の実をたくさんつけた木があります。猪鼻さんに訊くと、これは紫式部(ムラサキシキブ)、実は熟すと鮮やかな紫色に変わるそうです。また一つ発見です。この時期、紫色の実をたわわにつけた低木をよく見かけますね、私はあれが紫式部と思っていたのですが、正式には小紫(コムラサキ)だそうです。

続いて、郷土資料館と斜面林の間の細い道を行います。ムクノキの黒紫色の実がたくさん落ちていて、皆さん拾って食べています。口々にこれはおいしいんだと言っています。ほんとな？ 半信半疑、私も一つ食べてみました。甘くて干ぶどうみたいな味、食べる所は少ないですけど。そういえば野鳥に人気ナンバーワンなのは、このムクノキの実と何かの本に



書いてあった気がします。鮮やかな赤い色の実は、一見おいしそうに見せかけて、鳥を誘惑しますが、じつはあまりおいしくない。だから長く木に残っているそうです。なるほど、と食べてみて実感しますね。

広い道に突きあたったら、右に少し行くと、右が竹やぶ、左が斜面林の細い道があります。ここは昼間でも薄暗くて、雰囲気のある場所、林床には貴重な野草がまだ残っています。猪鼻さんが、これがムカゴイラクサ、と教えてくれます。茎にムカゴをつけるのがこの草の特徴で、それが識別するポイントになるそうです。私は葉がクワクサに似ていると思いました。家の庭にまいてみよう、このムカゴ少し持ち帰りました。

ちなみに、山芋のムカゴが手に入る方、ムカゴ御飯を炊いてみましょう。水かげんした米に、酒、淡口しょうゆ、塩で味をつけ、洗ったムカゴを加えて、炊飯器で炊くだけです。秋の香りがする御飯です。

少し進むと、キチジョウソウの群落がありました。淡い紫の花が開きはじめていて、本当に美しい。瀬田さんが“栽培種みたいにきれいね”と言うと、坂本さんがすかさず反論。“あら、野生種の花はすごくきれいよ” そうですね、私もだんだん、豪華なバラやぼたんよりも、自然のままに咲く野の花に、心惹かれるようになってきました。野の花には可憐であると同時に、なにか凜とした美しさがありますね。

左側の林の中に、いたばし野鳥クラブが架けた巣箱が見えます。おととしの冬には、オオコノ

ハズクがこの巣箱に入りました。私も穴から顔を出したかわいい姿を見ることができました。城址の森には野鳥が多く、私が見たのに限っても、オオコノハズク、アカゲラ、アオゲラ、モズ、シメ、シロハラ、コゲラ、ジョウビタキ、エナガ、ツグミ、カワラヒワ、シジュウカラ、メジロ、オナガ、ムクドリ、ヒヨドリ、キジバト、おととしの12月には、私たちのトンボ池に、ゴイサギの幼鳥がきました。他にも、渡りの途中の珍しい鳥が羽を休めにくることもあるそうです。



あかみち 左がオオコノハズクの巣箱のある森

林の奥で、騒がしい鳴き声がしてきました。カラスとは違います。猪鼻さんが、あれはカケスだと言います。胸がドキドキ、つい先日の10月12日、私は秋ヶ瀬の探鳥会に参加して、飛翔する美しいカケスの姿を見て、感激したばかりなのです。もう一度見たいと、そっと近づきましたが、鳴き声だけで姿は見せてくれませんでした。きっと今、カケスは大忙しでしょう。ドングリを木のすき間や地中に隠す習性があるのです。隠したドングリを後で食べますが、忘れてしまうのも多い。それで忘れっぽい人のことをカケスと呼んだんだ、と猪鼻さん。面白いですね。

山道の最後に出会ったのは、サネカズラの赤い実、たわわに果実をつけたオニグルミ、どちらも人が植えたものではなく、もともとの野生種だとのこと。オニグルミの果実も食べられるそう。皆さん好奇心旺盛で、食べられると聞くと何でも試してみるみたいですね。でも食べることが、その植物を理解し、親しみを持つ一番の近道かもしれません。

この後、梅林と、湧水の流れこむ、ミニトンボ池をめぐるしました。そこでもいろいろな発見がありましたが、それはまた別の機会に。あつという間に過ぎた2時間、楽しい散策でした。自宅のすぐ近くに、こんなにも豊かな自然が残っていることを、嬉しく思います。

都会の市街地は、人間に都合がいいように完全に管理された空間です。でもそこに残されたわずかな緑地で暮らしている生き物がいます。ちゃっかり人間を利用する、したたかさを持っているのもいるようですが…。そんな生き物のために、暮らしやすい環境を少しでも残しておいてあげようという考え方は、とても素敵だとは思いませんか？ 城址は、年に数回、きれいに草刈りされていますが、バッタ広場だけは刈らずにそのまま残してあります。セイタカアワダチソウ等帰化植物の抜き取り、ササの刈り取り等、管理は最小限にとどめています。そのためバッタ広場には虫がいっぱい、野鳥もやってきます。子供たちにとっては、きれいな花壇やベンチのある管理された公園より、よっぽど魅力的な遊び場ではないでしょうか？ カマキリやトンボを夢中になって捕まえている子供たちに何度も出会いました。水路の補修工事が終わり、トンボ池に水が流れこむようになれば、また水辺で暮らす生き物が戻ってくることでしょう。このような多様な

生き物が暮らしていける環境は、私たち人間にも、計り知れない豊かさをもたらしてくれるのではないのでしょうか？ これからも会の皆さんと一緒に、赤塚城址の森を大切に見守っていきたいと思っています（平田富砂子）。

後記 カケスに出会った

11月6日、もしかしたらカケスに出会えるのでは、との期待を胸に、双眼鏡を持ってまた城址に向かいました。鳴き声の聞こえた山道でじっと待っていると低い木の枝にカケスが止まりました。一瞬青と白のきれいな模様が見えましたが、アッという間に飛び立ちました。木々の間を飛んでいるのが時々見えるのですが、動きが速くて双眼鏡でとらえることはむずかしい。

梅林へと回ってみました。すると人気のない梅の木の下にカケスが2羽いるではありませんか。私を見て慌てて木の上に隠れました。そっと近づいて行くと、1羽、しばらくしてまた1羽、静かに森の奥へと飛んでいきました。なんだか夢を見ているような出来事です。なんでカケスがこんなところにいたんだろう、地面にドングリを埋めていたのかな？梅林をぐるっと回ってみると、なんと梅の古木の割れ目や小さな穴にドングリが埋め込んであるではありませんか。木の穴から芽生えたドングリもありました。驚きの発見です。ワクワク、ドキドキの1日でした。



梅の木の穴にカケスが隠したドングリ（左）と梅の幹から芽がでているドングリ

観察と活動の記録

9月20日（土）バッタ広場作業、池の棚田の様子を観察

ササ刈り。ササは大繁茂。クズ・ガガイモ・オギは残す。ヒメシソ、キンミズヒキ花、クモの子ども。

バッタ広場にやっかいな外来種のアレチノヌスビトハギが入ったらしく種がズボンにくっつく。バッタ広場には在来のヌスビトハギしかなかったのに残念。板橋区の植物園にあったアレチヌスビトハギが人にくっついてここに来たのかもしれない。今後要注意。

9月27日（土）バッタ広場ササ刈り、樹木のみ切り詰め。

カマキリ多数、赤とんぼ多数飛来。通りがかりのバードウォッチャーによると、オオルリ、ルリ

ビタキなどの渡り鳥がきているようだ。アキノノゲシ花。ガガイモの実2個、チカラシバが減りカゼクサが増えた。新たにヌカキビが出現。

子ども達がカマキリを捕まえに来たので、カマキリの行く末を心配したが、ほとんどを逃がしてくれた。

トンボ池棚田に出来たザリガニの巣穴を砂で塞ぐ（一つの穴で砂2リットルが全部入ってしまったほど深い穴だった）。キマダラセセリ、ムカゴイラクサ。

10月18日（土）（快晴）城址周辺観察会

10月25日（土）バッタ広場作業

ササ刈り、外来種の抜き取り（コセンダングサ、セイタカアワダチソウ、ヨウシュヤマゴボウ）。キチヨウ、ヤマトシジミ、マルカメムシ

半世紀前の赤塚崖線と溜池(1)

私が赤塚の溜池に初めて行ったのは1954年、小学校の小遠足の時だった。溜池の北隣にあった田んぼ（地図の①）でオタマジャクシを網で沢山捕ったことしか覚えていない。この場所は最近まで植木畑だった所である。これが今も続く赤塚崖線と私の付き合いの始まり、数えてみれば60年が過ぎてしまった。



以下は当時の記憶を地図と照合し、再確認するという私的な作業の記録である。読み難い、判りづらいは容赦して頂きたい。高島平の開発、新大宮バイパスの開通はこの地を

大きく変え、道路の位置もかなり変えてしまった。無くなってしまった道を辿るのは想像である。正確さも保証の限りではないということである。

溜池の周り

私たちはこの池を当時養殖池と呼んでいた。池の西側には木造平屋の建物(②)があり、ここで魚の養殖をやっていたらしい。私が行き始めた頃はもう止めていたようで廃屋になっていた。板塀に囲まれ、中は草ぼうぼうだった。現在、郷土資料館が建っている場所で、斜面との境にあるコンクリート通路の位置には溝状の小川があったが、水量は少なくいつも水は淀んでいた。

溜池は農業用水として利用されていたので、季節により水面の面積はかなり異なっていた。毎年かどうかは判らないが、冬は水が全く無いこともあった。冷たい風が吹く中でドジョウ掘りをしたことがある。池の底に溜まっていたヌルヌルの土を掘り返すとニュルッとドジョウが這い出てくる。小学校の同級生数人と夢中で泥を掘りドジョウを探す、体中泥だらけになったはずである。冬の寒さの中、濡れた泥にまみれて家に帰り、親に怒られたはずだが、その記憶は残っていない。



写真は昭和30年代に撮影されたという溜池(「図説板橋区史」より)、多分昭和30年早々の頃であろう。冬場で水は干上がっている。

画面中央の大きなマツは記憶にないが、右側に写っている斜めに曲がった大きな木は、イヌシデで今も健在である。斜面の雑木は撮影時より10年前頃に全て伐採されたようだが、上部のスギと水

際のマツ、イヌシデは伐られていない。スギとマツは用材なので判るが、このイヌシデはなぜ残ったのだろうか。何か謂れがあるのではないかと地元の方に尋ねたことがあるが、特に謂れはないとの答えであった。

地図の③の所から道を離れ、池の南側にあった農家の裏手を通り、小さな流れ(写真の左端)を渡り、このイヌシデの根元に着く。ここが私のエビガニ(アメリカザリガニ)釣りの定位置だった。斜めに生えたこの木は、根元から数メートル上まで上部が槌状に抉れ、簡単に登れた。田植えが近づくと池は満水になり、木の上から覗くと真下は水面だった。根元に積もった落葉の下で大きな黒い虫を採ったことがある。クロナガオサムシで、標本は今も手元に残っている。現在、板橋区周辺では絶滅した種で、板橋区産としては多分現存する唯一の標本であろう。

当時のエビガニの釣り方も書き残しておきたい。餌は辺りの田んぼにいくらでもいたトノサマガエル(トウキョウダルマガエル)を使った。捕まえたカエルを路上で高く放り投げる。硬い地面に落ちたカエルは動かなくなる。後ろ足の先から皮を剥がす。ナイフなどを使わなくてもきれいに剥ぐことができた。今思うと随分残酷なことを平気でやっ

ていたものだ。タコ糸をカエルの後ろ足に縛りつけ、雑木から折り取った小枝に結ぶ。水中に放り込むとエビガニは直ぐ食付いてくる。そおーっと水面まで上げ、タモで掬い取る。一匹のカエルで数十匹のエビガニが釣れた。数時間もやれば大体バケツに入りきれない程釣れたものだ。持ち帰ったエビガニを食べた記憶は無い。両親は東北地方の出身でエビガニが食べられることも知らなかったのだろう。タライの中で暫く飼い、みんな死に絶えた頃、また釣りに出かけたのであろう。 (釣巻岳人)

活動のお知らせ

運営委員会：11月22日(土)、12月20日(土) 12:30~13:30

作業・観察会の後にラーメンしらかばで報告や活動内容などを相談します。

連絡先：坂本(090-4618-1295)

●会報の発送は奇数月。お手伝いできる方はよろしく

日時：1月17日(土) 12:30~

活動の問い合わせは事務局 瀬田(3969-7124)まで

活動予定いろいろ

1 赤塚ピオトープの観察と環境整備 いずれもトンボ池前集合。

11月22日(土) 10:00~12:00 バッタ広場のササ刈り、外来種の抜き取り等

12月20日(土) 10:00~12:00 バッタ広場ササ刈り、外来種の抜き取り等

1月17日(土) 未定

2 日暮台公園樹林地の観察プラスα

(樹林地内の推移と林縁植物を観察、様子を見て林縁の草取りなど)

12月6日(水)、1月10日(土) いずれも10:00~11:30 日暮台公園前集合

●ピオトープ管理のボランティア大歓迎

当会は、自然と共存するまちづくりをテーマに、生き物のすめる水辺(赤塚トンボ池)や草地(赤塚公園バッタ広場)などの管理作業、自然樹林地の定点調査などを行っています。活動の内容は、身近な動植物を観察しながら、大きくなった木を切ったり、セイタカアワダチソウなどの外来植物や生育旺盛なササを刈り取ったり等々です。一緒にやりませんか。

●会員になってくださると板橋の自然情報を中心とした会報「みずみどり」(隔月発行)お送りします(年会費2000円：振込先は表紙に記載)。